

◆ 2017 年 7 月例会報告要旨

印欧語におけるケルト語の位置

神山孝夫 (大阪大学文学研究科)

音韻の側面を中心に、印欧諸語内でケルト語が占める位置とその主特徴、またイングランドやフランス等、現在の非ケルト語地域に残るケルト語の痕跡、ないしその基層的影響について概観した。

ケルト語は印欧語の中で音韻的にかなり素直な言語である。印欧祖語 (P(roto-)I(ndo-)E(uropean)) との音対応においてやや特殊なのは下記 6 点である。

1. *p > *φ > h > ゼロ

e.g. PIE *nepot- “nephew” > Celt(ic) *neφot- >

*nehot- > Ir(ish) *nia* /nʲiə/, W(elsh) *nai*, Br(eton) *ni*

ケルト語において、無声両唇閉鎖音は弱化してついには消失した。中途に予想される摩擦音の段階は *Hercynia* (< *perk^wu- “oak”) 等地名に残る。

ゲルマン語 (Gmc.) とアルメニア語 (Arm.) では類似の現象が閉鎖音組織全体に起こるが、ケルト語において無声両親閉鎖音のみがこの変化を生じた原因は杳としている。後に Goid(elic) に組織的に生じる無声閉鎖音の摩擦音化が、両唇音の場合に限って早期のケルト語全体に生じたとも疑われるが、相対年代的に無理である。ただし、他言語における類似現象からすると、両唇無声閉鎖音が弱化しやすいという通言語的傾向は指摘しうる：

Lat(in) *f* > Sp(anish) *φ > h > ゼロ

e.g. Lat. *filia* “daughter” > Sp. *hija* /hija/ > /iχa/

日本語ハ行： *p* > φ > h (原因不明)

2. *g^w > b

e.g. PIE *g^wou- “cow” > Celt. *bow-

> Ir. *bó* /bo:/, M(iddle) W. *bu*, Br. *bu*

3. *k^w > k^w / p

e.g. PIE *k^wetwor- “4” > Celt. *k^wetwor- >

Ir. *ceathair* (cethir) /kʲahərʲ/, W. *pedwar*, Br. *pewar*

いわゆる Q ケルト語 (k^w) と P ケルト語 (p) の分類のもとになった現象であり、過度に重んじられる嫌いがあるが、唇軟口蓋音と両唇音の混同は他所にも頻発するため、実はさほど特殊な現象ではない (略語補遺 E(nglish), Goth(ic), Rom(anian))：

Lat. *quinque* < *k^wenk^we << PIE *penk^we “5”

E. *five*, Goth. *fimf* < *pempe << PIE *penk^we

Rom. *apa* << Lat. *aqua* /ak^wa/ < PIE *ak^wā “water”

Goth. *wulf*s < *w_lpos << PIE *w_lk^wos “wolf”

4. *s > *h (> ゼロ)

e.g. PIE *som-o- *or* *sm̥-h₂-o- (√*sem-) “summer” >

Celt. *samo- > O(ld) Ir. *sam* /saṽ/, Ir. *samhradh*

/saurə/, O(ld) W. *ham*, W. *haf*, Br. *hañv*

この推移は主に Brit(tonic) と大陸 Celt. に散発的に生じ、*Halstadt* (< *sal- “salt”) にも見える。*s が唯一の摩擦音であった早期の印欧語においては *s* > *h* は音韻対立を損なわない、無理のない方言的推移であり、日本語方言にも類例が見られる：

Greek ὑπέρ /hypér/ < PIE *s-uper “over”

Avestan *ahmi* < PIE *es-mi* “I am” (√h₁es-)

Arm. *hin* < PIE *senos “old”

Sanskrit -aḥ /aḥ/ < PIE *-o-s (nom. sg.)

Osaka Japanese おばはん *obahan* < *obasan*

5. *w > Goid. f / Brit. g^w

e.g. PIE *wēnto- “wind” (√h₂weh₁- “blow”) > Celt.

*wīnto- > *winto- “wind” > OIr. *fet* /fəd/, Ir. *fead*

/fiad/ “whistle”, W. *gwynt*, Br. *gwent*

[w] は一般音声学的にややまれな音であり、[w] と [v] の両方を持つ言語はさらに少ない。PIE *w は多くの言語で [v] として受け継がれ、Goid. では恐らくこの段階を経て [f] に至ったと考えられる。

他方、Brit. に生じる [w] → [g^w] の置換・発達は各所に散見される (略語補遺 F(rench), G(erman), Ic(elandic), O(ld), H(igh), □: loaned from)：

(O)F. *garder* □Gmc. *wardōn (E. *ward*, *guard*)

(O)F. *Guillaume* □OHG *Willahelm* (E. *William*)

Olc. *tryggr* < Gmc. *trewwjaz (E. *true*, G. *treu*)

6. *ē > ī

e.g. PIE *rēg- “king” (√h₃reg- “lead”) > Celt. *rīg-

> Ir. *rí* /ri:/, *rhi* /rʲi:/, OBr. *ri*

まれな推移であり経緯の詳細を欠くが、他印欧語にも見られないこともない：PIE *ē > Slav(ic) *ě > Cz(ech) *í* (= *ī*), S(erbo-)Cr(oatian) Čak(avian) *ī*, Uk(ranian) *i*; e.g. Old Church Slav. *děva* > Cz. *díva* (*děva*), SCr. Čak. *dīva*, Ukr. *divka* (cf. Russian *дева*).

緩音化、鼻音化、Goid. の硬口蓋化等、ケルト語内での特徴的な音変化、ならびに他語派に残るケルト語の痕跡等については紙幅の制限により略す。